

地圖に現はれた後套水道の變遷

日 比 野 丈 夫

他の部分を前套といふ風に區別してゐる。

一
古くから黄河は千里一曲といはれる。寧夏省中衛縣から東北に向ひ寧夏の東南方横城に至つて長城を突破し寧夏綏遠兩省の疆界をなしつゝ北上し、狼山々脈につき當つて方向を東に轉ずる。さうして包頭を過ぎ托克托の附近から直角に折れ山西・陝西兩省の疆界をなして南下し、潼關で華山に衝突して再び東に向ふ。この北及び西を黄河に圍まれた長城線以北の綏遠省南部の地を明以後河套と呼び、清朝には鄂爾多斯七旗の駐衛地であつたからまた鄂爾多斯ともいふ。地圖を見ると鄂爾多斯の西北角で黄河が二股に分れその一つがグルツと東北に半圓を描いて又合してゐる所がある。この不思議なそら豆のやうな恰好をした部分を後套、鄂爾多斯とは勿論これをも含めての總稱であるが、その

この後套の地は古くから漢族北狄抗爭の巷となつた。戰國時代趙の武靈王は戎狄を驅つて北黄河を渡り陰山にそつて城塞を築き、秦の始皇はそれより更に北に邊障を設けてこの地を九原郡の一部にした。前漢朔方郡の臨河縣は後套内にあつた。後漢以後羌胡の雜居する所となり縣の置かれたことなく、五胡亂の後には前後趙、前後秦の興廢あり、或は赫連勃勃の夏國の佔有する所となつたであらうが、文獻に徵すべきことがない。北魏には夏州の北境に、隋には九原郡に屬した。唐の太宗は貞觀二年突厥の頡利可汗を追つて河套を平定し河南に豐州(九原郡)を置き、永淳中張仁愿は進んで河を越え河北に三受降城を築いて突厥の寇道を絶つた。かくて唐の勢力は遠く漠北に及び、後套の地も久しぶりで漢族の朝廷の支配下に立つことゝなつた。し

かし唐末から夏國の占據する所となり五代を経て遼金
 が交々興るに及んで絶えず兩國間の繫争の地域であつ
 た。明の太祖が北元を伐ち擴廓帖木兒を漠北に追ひ、
 成祖が兩度親征の軍を進めて漠南を掌中に收めたやう
 な時代は別として、その中葉以後、蒙古族がこゝに侵
 入して來て屢々河を渡つて北邊に寇し韃靼部を復興し
 た達延汗の孫究必里克墨爾根が右翼濟農としてその兄
 弟と共に鄂爾多斯に猛威を振ふや明は榆林邊牆を築い
 てこの地方を全く放棄してしまつたのである。

さういつた次第で鄂爾多斯の地理、殊に後套地方の
 地形の如きは清朝になるまで殆んど明らかにされなかつた。
 明の羅洪先の廣輿圖や陳組綬の皇明職方圖など
 みても一向地名など記入されてをらぬ。例へば廣輿圖
 の九邊總圖には河套吉囊子駐牧など記してゐるに過
 ぎない。吉囊とは即ち究必里克のこと、その弟の俺
 答や老把都兒等と共に套虜といふ名で極めて明人に恐
 れられ當代の史書に屢々みえてゐる。

二

古くから黄河が二股に分れることは知られてゐる

が、元來はその北流の方が本道であつたらしく、南流
 が本流となつたのは清朝の初からである。劉齊阜昌の
 禹蹟圖や宋の淳祐肇理圖などには明らかに北流だけし
 かあらはしてをらぬ。河が狼山々脈につき當つて方向
 をかへ山脈にそつて東に流れるのは地形からみても當
 然のことであるが、年々水の押し流す巨多な土砂の爲
 めに次第に北道が淤塞され河の本流が南に遷つたわけ
 である。

第一圖は彼のダンヴィルの支那地圖帖のタルタル・
 第三圖(27)である。一七三七年和蘭のヘーグのアン
 リー・シュールレル出版のものによる。この蒙古・長
 城の地方はブーヴェー、レヂス、チャルトウの諸師に
 よつて最も早く一七〇八年から翌年にかけて測量せら
 れたのであらう。康熙の盛時に於いて最も誇るべき大
 事業の一つである支那全土に互る實測は康熙四十四年
 に始まり約十年を経て完成した。この皇輿全覽圖に最
 も近いと考へられるものが、近年石印本となつて容易
 に手にしうる様になつた奉天故宮所藏の「滿漢合璧内
 府一統輿地祕圖」である。さうしてダンヴィルの圖と
 いふのはこれ等宣教師が巴里のデュ・アルド師の許に

地百餘里の間三渠並び東流すること二百六十里、後旗の北境をすぐ。即ち古の朔方河南の地である。最北の一派は中ごろ分れてまた合し東の方噶札爾賀邵(和碩)山 (Gajar hoch) の南大漢得兒山(達罕德爾阿林 Tahandel Alin) の西南に至り始めて折れて東南流し、又分れて合し、もう一度分れて東南する。

合せて百三十里。吳喇志旗 (Ourai) 西の墨爾楚克賀邵山(謨爾綽克和碩 Moloc hoch) の北に至り始めて折れて西南流する。北派が西から來て會し又西南して几爾哈郎圖(吉爾哈蘭圖)の南に至ると南派もまた西から來て會し、三派はまた合する。古より南河北河の二派があるといはれるが、今では三支分合織るが如き有様である。

括弧の中の漢字は乾隆十三排圖、羅馬字はダンヴィル圖による。康熙や乾隆の圖では河道は三つ共同じ太さであらはされてゐて何れが本流であるか明らかでない。水道提綱にたゞ三支分合といつてその關係を示してをらぬ理由が領かれる。しかるにダンヴィルの圖では最も南に當るのを特に太くしてこれが本流であることとを明らかにしてゐるのは、本圖が皇輿全覽圖そのも

のを襲つただけではなく、その他の宣教師の報告書類が參考になつたことを物語るものであらう。それから注目すべきはダンヴィルの圖には黄河の本流よりも更に南に Tch'ue Pira といふ細流が記されてゐることである。これは康熙や乾隆の圖には全然見えず、又新しい地圖によつてもこれに比定すべきものが見當らぬ。しかしその名はデュ・アルドの支那全誌第四冊に收められたジェルビヨン師の第七回目の紀行、即ち康熙帝に扈從して寧夏に行つた往復の旅行記に出てゐる。一六九七年五月二十六日(康熙三十六年四月七日丙辰)康熙帝は黄河の西岸白塔の附近から一部の臣下を率ゐて船で黄河を下つたが、ジェルビヨンは陸路の一行に加はつて黄河を東に渡り東北に進んで Tch'ue mouren といふ小川を渡りこれに沿つて東に行くこと四日再びこれを南に越えて黄河の本流に沿つて東したとある。

チグピラに沿つた道は第一圖に破線で描かれてゐるのがそれで原圖には Route de l'Empereur en allant à Ninghia と記されてゐる。然るにこの河は康熙や乾隆の圖に見えないことは前にいつた通りであるが、グ

ロジエー師が一七八五年巴里で發行した支那誌初版に添へられた地圖帖(地圖)に全然省かれてゐるのは如何なるわけであらうか。ダンヴィルの圖が康熙の輿地祕圖と全く同じでないのは考へうることであるがこのグロジエー師の支那圖がデュ・アルドの支那全誌の圖と全く同じものであるといひながら全面的に節略されてゐる部分があるのは不可解である。

この附近に關する水經注の記事を要約すれば次の如くである。

河は漢の朔方郡臨戎縣故城の西を過ぎて次第に北流する。枝渠があつて銅口といふ所から東に出、沃野縣故城の南を通りつゝ沿岸の地を灌漑してゐる。河水は又北し屈して屠申澤となる。こゝから南河が出てゐる。河水は又北にめぐり西甌渾縣故城の東に溢れる。その水は積つて屠申澤となる。澤は東西百二十里。だから漢書地理志に屠申澤縣の東にありといつてゐるのが即ちこの澤なのである。關駟の十三州志にはこれを甌渾澤といつてゐる。河水は又屈して東流し北河となる。漢の武帝元朔二年大將軍衛青が梓嶺をわたり北河に梁したのはこの河である。東し

て高國の南をすぎて東流し、南に屈して河目縣の西を通り南して南河と合する。南河は西河より分流して東し臨戎縣故城の北、臨河縣の南をすぎ二百里ばかり流れて東の方河の本流に合する。

こゝに北河とあるのはつまり古く黄河の本流と考へられたもので西河に對する呼び方であらう。清朝になつて實測された圖はやゝ複雑になつてゐるだけで、河道は北魏時代から變化がなかつたことがわかる。

三

第二圖は民國二十三年四月上海の申報館より出版された中華民國新地圖による。これを上のダンヴィルの圖と比べてみると全く同じ場所とも考へられぬ程變つてゐる。驚くべきことには漢書地理志以來著名な屠申澤即ち騰格里泊も姿を消し、庫々泊や Kisan Ono(集三鄂模)は影も形もない。南北河と噶老圖河が並流してゐた代りに南北數多の渠道が網の目の如く通じてゐる。これは決して康熙時代宣教師の測量が不完全であつたからではなく後に述べる様に清朝末期から民國にかけての人工的渠道の發達した結果なのである。これ

らの溉渠は道光咸豐の頃から次第に開鑿され始め光緒の終には已に今日の十大公渠も形を整へてゐた。それ等は後に説くことゝしてなほ暫く地圖について述べてみよう。後套の河道がこんな形で地圖にあらはされたのは民國二十一年地質調査所出版の中國地形圖が最初らしい。その資料は私の知る限りでは民國十七年、全國陸軍測繪總局から出版された十萬分一綏遠省地形圖である。禹貢七卷八九合期（察綏專號）に收むる「關於察綏問題的圖籍與論文索引」や「國立北平圖書館中文輿圖目錄」（正續）等には縮尺は小さいが次の如きものが見える。

綏遠全圖 六十萬分一 綏遠都統署測繪所製 民國十七年印行 一幅

綏遠地形圖 七十萬分一 同

綏遠省分縣圖 一冊 綏遠省社會教育所 民國二十二年印行

綏遠省分縣圖 一冊 綏遠省民衆教育館編製 民國二十三年印行

特に後套地區に關しては

綏遠特別區域後套圖 五萬分一 西北邊防督辦公署測製 民國二十四年印行 三四幅

後套形勢一覽圖 屯墾處測量隊製 民國二十二年

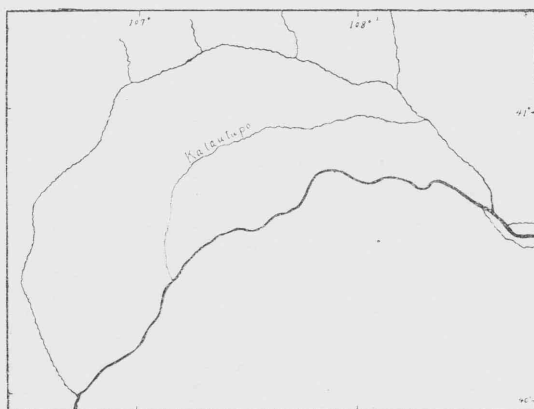
等があり、これ等は何れも相當の權威ある正確な圖であらうが遺憾ながらまだ目に觸れる機會がない。禹貢

六卷五期（後套水利調查專號・）の附録として出版された（民國二十五年十一月）三十萬分一後套區域總圖がこの地域を一覽するに最も便利である。これが何に據つたものか全く明らかでないが、略々前記十萬分一綏遠圖に一致する。民國製の十萬分一圖が果して何處までの信憑度を有し得るかといふことは疑問に屬するが、後套の地形に關する限り從つてそれに基いたと考へられる新地圖は他のあらゆる圖よりも新しく正確であることは疑ないと思ふ。昭和十一年滿鐵資料課から出版された北支那圖の如き全然新地圖によつてゐる。東方文化研究所の東亞大陸諸國疆域圖又同様である。

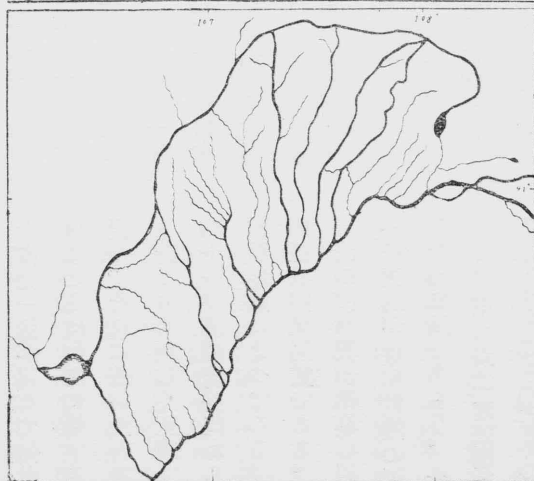
清の胡林翼が編纂し同治二年武昌で刊行された大清一統輿圖が康熙乾隆の圖を一步も出てゐないのはやむを得ぬ所であらう。光緒會典の圖として同じことである。第三圖は舊獨逸測量局の百萬分一支那圖即ち Karte von Ost-China の榆林圖幅の一部で、一九〇二年の製版にかゝる。河道は頗る簡單で溉渠の如き一つも現はれてをらず、到底實際の測量によつたものとは考へられないが、騰格里泊がなくなつてゐるのが注意されよう。二十世紀以後西洋で出版された地圖は多く

これに基いてゐる様である。ステイラーの一九二五年版 Atlas of Modern Geography の如きもそれであるが、しかし一九三四年以來分行されつゝある國際版

第三圖



第四圖



兩圖共に縮尺百萬分一を三分の一に縮小する
縮めためは本圖は三分の一に當る

らぬ。河道は獨逸の百萬分一圖を參考した部分もない様ではないが殆んど大清一統輿圖そのまゝに過ぎない。第四圖は民國三年參謀本部製圖局の編纂になる百萬分一中國輿圖の五原

圖幅である。第二圖には餘程近いが、違つてゐるのは黃河北道が通つてゐることゝ騰格里泊があることである。この形は民國の始めから最近に至るまでの大概の支那全圖に現はれてゐる。民國初年の參謀本部製圖局の四百萬分一中華全圖、民

では必ず改正された圖が出るであらう。それでは我國の陸地測量部の百萬分一東亞輿地圖は如何。この部分は包頭圖幅に當り明治三十六年（一九〇三）の製版で該圖の中では最も古いものゝ一つで以後改版もされてを

國十八年出版の歐陽纓の中華析類分省圖等を始め、昭和二年出版の我が陸地測量部の東亞大陸圖さへさうである。最も新しい所では新地圖の發行に後れること僅か二箇月民國二十三年六月商務印書館から出版された

中華教育文化基金董事會編譯委員會編製の中國分省圖である。序分によれば地質調査所の資料に據つたとあるに拘らず、同所の資料に基いて作られた新地圖と全然異なりむしろ古い百萬分一圖を利用した形迹があるのは中國分省圖が新地圖に比べて餘程粗雑なことを示すものであらう。それはこの形がどうしても民國初年の實際の地形をあらはしたものと考へられないからである。しかしこの地方の水道の變化を實際の地圖について逐一たどるといふが如きは殆んど不可能のことに屬する。書目によれば綏遠省の地志や調査書類は相當に多く出てをり、殊に官廳で刊行されたものには重要なものが見られるが我々は容易に手にすることが出来ない。又近時邊疆に關する圖籍は續々出で、汗牛充棟も只ならぬ有様であるが、何れも五十歩百歩一向我々を満足させて呉れる様なものがない。古いながら民國十年出版の張鼎彝の綏乗の如きは最も要領のよいものゝ一つである。その卷六に黃河水道の現狀に就いて次のやうにいつてゐる。

北流する一派は黃河故道である。古の所謂北河で五角渠より北行するが、今では涸れて迹がない。所

謂る溢れて騰格里泊となるものもまた變じて沙阜となつてしまつた。北して義太魁の南に至ると諸渠がこの涸河を藉つて尾閘としてゐるので始めて水流がある。迤つて東行し公義恆の東に至り岐れて二枝となり橢圓形をなし東流して相會する。又東して烏蘭掲包の南に至り迤つて東南行する。古道は余太、台梁の南に至り石門障を過ぎ、水は烏拉山を包み東に繞つて南行し南流と合したのである。今道は烏拉山西に至り溢れて烏梁海泊となり、再び南流と通じない。

こゝに北河の古道が現今よりもずつと東に行つて烏拉前山を包んで南流し南河に合したといふ説は、古書に見える陰山、陽山の解釋から來てゐるのであるが疑義が多い。それは兎も角當時已に騰格里泊は河水の運ぶ土砂や西北方沙漠から吹き送られる砂塵の爲めに埋没して砂地と化し、黃河北流は諸々の溉渠の放水路としてのみ僅かに命脈を保ちつゝ東流して烏梁(又は拉素海)に入り黃河本流と直接連絡しなかつた。その名も五加河、烏家河と呼ばれる。かく北道の上流下流が杜絶してしまつたのは決して民國初年に初まるのではなく

古く道光の頃に溯るとさへいはれてゐる。又綏乗卷十には光緒三十年の頃墾務大臣貽穀が元愷をして五加河の故道を調査せしめた時の復命書載せてゐる。下流から逆にのべてゐるがその一節に、

義太魁より西行數里、河身分れて兩道となる。一は北山の根に循ひ可々淖に至るが、沙山横壓、渺として蹤跡がない。一は西南より杭錦の西巴噶に入るもので、土人は呼んで岡々午作河となし、蒙人は呼んで老不更河といふ。老不更とは舊大河といふ意味である。西に迤れば更に沙溝といふ。堰長約一百二十餘里。沙山横亘し勢長峯の如く、寛長等しからず高下懸殊してゐる。再び納只亥より大河口に至るまで行くこと七十餘里、地均しく平坦、河身を辨じない。僅かに準噶爾教堂鑿つ所の渠、寛さ三丈餘のものであるだけで當年の河道の影響がない。又（黄河の本流を）西行して阿拉善境の傅家灣に至ると、その附近を俗傳では五加河の故口といつてゐる。土崖斷續して北行すること三十餘里沙山に入つて隠れてしまふ。僅かに西岸があるが、黄河衝刷の遺堤に過ぎず、五加河の故口ではないのである。

とある。當時に於いて黃河北道の跡は義太魁より上流は全く不明であつた。義太魁より西南する一道といふのは禹貢の後套區域總圖に斷續せる沙地と細長い水溜りの連續となつて現はれてゐるのがそれらしい。五加河のみについていふも第四圖に屬する地圖は全く性質を異にした二三の地圖から編纂された一の想像圖に過ぎないことが明らかであると思ふ。

四

今まで地圖の品評に意外の頁數を費したが、地圖の上にもかくの如き著しい變化を齎した清末以來のこの地方開發の事情に就いて少しく述べる所がなければならぬ。河套地方に漢族の農民が入り込んで來て農耕に従事し始めたのは已に康熙時代からのことである。彼等は或は山西省から北に出で黄河を溯り、或は陝西省から長城を越えて蒙地に入り、或は寧夏方面から黄河を下つたものもあるであらう。それにしても蒙古牧地の開墾禁壓は殆んど清一代を通じての一貫した政策であつたから農民の進出は容易ではなかつた。初め彼等は河岸の沖積地を利用して堤防を築き河流の氾濫を

防ぎつゝ一時的の耕種に従事するのみで、秋收穫を得れば又故郷に歸つて行くといふ状態であつた。しかし彼等の定住が次第に行はれると共に道光・咸豐の頃からその地の蒙古官吏と結託し一定の租を納めて土地を借り佃戸を募つて小作せしめ、或は土地を農民に轉賣する所のいはゆる地商なるものが現はれるに至つた。後套の地方は比較的清朝の支配力も稀薄で蒙旗の壓力も他の地方程に強くなかつたことは彼等地商の發展を容易ならしめたであらう。降雨の少ないこの地方では耕作は河水に俟つより外なかつたので、彼等は天然河を整理し進んで渠道を鑿ち頻りに荒蕪地を開拓して行つたのである。後套の最も西部なる烏拉河沿岸の開墾は已に乾隆末年に溯るといはれる。即ち楊鳳珠なる者によつて烏拉河の支流が改修せられこの附近に漢族農民の定住が行はれたのが後套に於ける農耕の初まりであつた。これが今日の楊家河子渠の前身である。西部最大の渠たる纏金渠即ち今日の永濟渠は道光五年に開かれたものであるが、この渠道を中心とする耕地は最も廣く已に咸豐年間に於いて達拉特旗の收むる租銀は十萬に上つたのである。咸豐中には現今の長濟渠、塔

布河渠などが或は開鑿され或は天然河を利用して作られてゐる。その他現在私有に屬する渠の中では舊昌火渠は早くも康熙四十二年に開かれたといはれ、合少公中渠は咸豐元年に成つたものである。同治年間となると、今日の通濟渠、黃土拉亥渠、豐濟渠等重要な渠道は殆んどこの時代に手が着けられたのである。永濟渠、十大股渠、哈拉烏素渠等の私渠も鑿たれた。これらの渠はもとより資力ある地商の手によつて構築管理せられた。地商の中でも同治の初より民國にかけて活躍した王同春は永久に忘れられぬ人である。王同春は河北邢台縣の人であるが同治初年後套に來り郭大義といふ地商の家に寄寓した。郭氏とは當時の天然河たる短辮子河を利用して先に述べた通濟渠を開いた人で、これは最初その名によつて老郭渠とも呼ばれてゐたのである。王同春はこの開鑿に於いて既に重要な役割を力めてゐるが、彼は水利に對する天才的な能力の所有者で、蒙地を租借して墾地を増加する一方、隆興長に本據を定めて、獨力光緒七年には永和渠を開き、次いで今の義和渠を開き前後十年の心血を注いで全長一百七里を完成した。これは初め王同春渠とも呼ばれ

たが、この大規模な渠道の成功と共に隆興長は後套の中心地となつた。この頃又沙河渠を開いてゐる。彼は内地から流亡して来る貧農を收容し土地を貸して耕作せしめ茫々たる荒野は數年にして居然たる村落をなすといふ有様で清末北支那内地の疲弊に比べて彼の下に集つて活を得たものは數萬に上つたといはれる。實際光緒二十八年までは彼の勢力は着々のびる許りで後套の王者の地位に坐つてゐた。今までに上げた諸溉渠もその開鑿に際し、或は淤塞した様な場合、改修、整理に彼の力を借りないものはない程であつた。最近になつて漸く後套開發の恩人たる彼の事蹟は人々の注目する所となつて來た。民國二十三年包頭に旅行してその事蹟を耳にした顧頡剛氏はその十二月十八日の大公報史地週刊に「王同春開發河渠記」を書き、更に翌年二月の禹貢(二卷十期)に稿を改めて發表した。同年十二月の同誌(四卷七期)に王誥外二氏によつてその軼事がのべられ、翌年十一月の同誌(六卷五期)に張維華氏が「王同春生平事蹟訪問記」を草してゐる。この最後のものを以て最も完全なものとしてよからう。光緒時代に於ける後套の開發は實に驚くべきものがあつた。王同春が前後四

十年の間に經營した墾田だけでも三萬頃に上るといはれてゐる。多數の渠道は黃河より水を引いて多く西南より東北に向ひ黃河の舊北道たる五加河を放水路とする。これ等幹渠からは無數の枝渠がそれから更に子渠が派出して縱横網の如く連絡せられ、周圍の荒蕪地は肥沃な耕地として開けて行つた。かくして漢人の夥しい定住が行はれると共に、牧地を失つた蒙古族の北方移徙が年と共に著しくなつて行つたのは當然である。從來の牧畜による收入では生活を維持出来なくなつた蒙古王公達が、牧地を地商の私墾に委ねることによつて得る利益に依頼する様になつたのは、もとより資本主義の前に於ける遊牧民の敗退以外の何ものでもなかつた。

それは兎も角光緒末年に於けるこの地方の開發はまことに前代未見の進歩を遂げたものであつた。光緒二十六年義和團事變の際京師に赴く途中この地を通過し土地の肥沃なのを看取した岑春煊は翌年山西巡撫に就任するや蒙地の開墾を奏請した。その結果二十八年一月兵部左侍郎貽穀が欽命督辦蒙旗墾務大臣に任命せられた。その事業は要するに從來のいゝ非合法的に行

はれ來つた私墾を官辦開墾に改めるにあつた。これは蒙古族の土地に對する支配權を危くするものとして彼等の猛烈な反對を呼び遂には叛亂をさへ起すに至つたが貽穀の努力は西盟の伊克昭盟の説得に成功し、先づ達拉特旗を次いで烏審旗、札薩克旗を遂に杭錦旗が開墾に同意した。さうしてこの地方は西盟墾務局ならびに西路公司の管轄の下に次第に私墾地が官辦に統制される様になり、渠道もその手に依つて改修、増築されて行つたのである。多數の地商も犠牲的にその墾地を墾務局に移管せしめられた。王同春の如き田三萬五千餘頃、大渠五道、支渠二百七十餘道を官に奉納せしめられたといはれてゐる。

貽穀の在任中は相當の成績を上げたのであるが光緒三十四年彼の失脚後は新發展を見ない。民國に入つてからは管理官廳は屢々改變があり、政情の不安定は何等一定の工作が加へられなかつた。近年になつて西北開發の聲が叫ばれ各種の施設も試みられてゐる様であるが、長年の間開濬も加へられず泥土の淤塞に委ねら

れてゐた渠道の改修は容易の業ではない。元來後套の地形は北方が高く南方が低いにも拘らず、南より黄河を引いて來なければならぬのであるから、その放水路たる五加河は下流殆んど淤塞し、それが流れ込む烏梁素海は一帯の窪地と化し夏季出水の際は一面の洪水を來す。近年南に向つて退水渠を作つて黄河に放出する工事が行はれたが不完全である。日支事變以後は益々これ等渠道の修理は放置せられ廢頽のまゝに見捨てられてゐることであらうが、水利工作は蒙疆政府にとつても重要な一事業たるを失はないであらう。

本文中に擧げ得なかつた主な參考書は左の如きものである

王 詰 後套渠道之開濬沿革(禹貢七卷八九合期)

安齋庫治 清末に於ける綏遠の開墾(滿鐵調査月報十八卷

十二號、十九卷一・二號)

西北研究所 後套(五原及臨河)事情(滿鐵調査月報一九卷

五號)

張含英 黄河志第三編

廖兆駿 綏遠志略